



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「朱夏の女優黒木瞳のインド ②」

今だから告白するが、われわれ一行は「観光ビザ」で入国していた。

(つまり違法なのだ)

撮影ビザを申請していたが、インド本国からの許可は遅々と進まず強行することになった。俳優さんのスケジュールがタイトで予定を変更することができなかったからである。全く暴挙かという、そうでもない。一週間後にやって来る撮影隊のビザは取得できると大使館は明言していたからである。

われらロケハン組は、世界遺産タージマハールがあるアーグラ、藩王国の都ジャイプルを巡って撮影に適した場所の選定をした。監督はインドが初めてなのでイメージがつかめない。ロケハン中に脚本のイメージを固めていった。アブさんはコマ撮り計画を緻密に進めていた。なるほど、撮影はこのような手順でするのか、とわが輩は興味津々であった。

ロケハンなので緊張感はなく、夜は映画界の裏話で盛り上がった。

堅物のイメージがある某女優のイタズラ話は、こうだ。

喫茶店でウエイトレスがお茶とケーキ運んできた。ウエイトレスが席を離れると、彼はズボンの中に手を差し込んで陰毛を一本引き抜いた。それをぱらっとケーキに乗せて、ウエイトレスを呼んだ。

「毛が入っていた。どうしてくれるの」

困惑するウエイトレスの顔を見て

「御免。冗談だよ。ワハハ」

人の悪い冗談だが、女優だから冗談で済まされた。

(そのケーキを女優は食べたか？ 食べただろうね)

監督の話も面白かった。監督が東京のマンションの部屋に帰ると何もなかった。

(泥棒に持っていかれたのか)

実は同居していた女性が家財道具一切をもっていったのである。残されたのは自転車一台だけであった。脚本家というもの女性にもてるようで、その類の話はつきることがなかった。(女性に逃げられた話が多かった)

監督は銀座のホステスや懇意の女性など指を折って数えながら盛んにお土産を買いあさっていた。どちらかと言うと憎めないお坊ちゃん育ちの人柄だ。

黒木瞳についての噂話は、こうだ。

「黒木という芸名は五木寛之がつけたらしいね。あの二人はどうも怪しい」

「二人は福岡県八女市で同郷だから、名付け親になった、と聞いた。知らんけど」

黒い瞳が印象的であったから黒キ瞳と名づけた。

などなど確かな根拠があるわけではない与太話である。わが輩には異世界の話で結構楽しんだ。

黒キ目というと、南インドのマドゥライを想起する。実はわが輩は数日前にマドゥライに行っていた。われら巡拝団は3月1日に成田を出発した。それに先立つ2月28日にアライバル・ビザの発給とE-visaの申請が停止された。某航空会社はE-visaの搭乗を断るといふ混乱が生じた。われらは一番確実なステッカー・ビザを取得していたので入国できた。しかしながら、3月3日発給済のステッカー・ビザでも一時無効となり渡印できなくなった。われらはすでに入国しているので問題はなかった。

聞くところによると、資格を取得するための研修グループは直前にキャンセルになった。コロナウイルスを恐れたのか、ビザに不備があったのか不明だが、アーシュラム（研修所）は内心喜んだという。ウイルスいっばいの日本人を敬遠していたのだが、断ることはきかない。だから、中止にしてくれてありがとう、というわけだ。

ところが、われら巡拝団は熱烈な歓迎を受けて帰ってきた。この違いは何か。お恐れながら言うと、われらは「インドによばれていた」のである。カミ・ホトケのご招待を受けていたのである。

そのカミとは、マドゥライの女神ミーナクシーなのだろうか。

マドゥライは南インド・タミル州第二の都市である。世界遺産ミーナクシー寺院が有名である。女神の名前ミーナは魚、アクシーは目で、「魚の目を持つ女神」となる。漁師たちが信仰していた女神であったという説がある。しかしマドゥライは内陸部にあり、なぜ“魚”と比喻されたのであろうか。

叙事詩に美しい目の象徴としてカヤル魚の比喻が使われる。カヤルは淡水魚、鯉の一種だと言われている。マドゥライにはヴァイハイ川が流れているので鯉がいたのかもしれない。「鯉の滝登り」は中国伝説だと言われるが、その大元はインドだとも考えられる。聖地シュリンゲリーの川には、丸々太った鯉が泳いでいる。

南インド舞踊バラタナーティヤムの踊り手の化粧の目張り（ガジョール）を見ると、魚のような形に見える。美しい目の象徴といえる。女神の目は、大きく輝き美しくなければならぬ。

魚にはマブタがないので閉じられることがない。和尚さんがポクポク打つ「木魚」は、読経のときに居眠りをしないために名付けられた。

女神の目も閉じられることなく四六時中、信徒たちを監視している。怖い存在でもあるが、慈悲の目も備えている。人はカミを恐れもするが、すぎるのもカミでもある。

黒キ瞳は、わが輩を四六時中見つめていたのか。それは監視なのか、慈悲の目なのか。それともわが輩の妄想なのか、おいおい明らかになるであろう。次号をご期待あれ！